

ヲ過テ橋本ニ到ル、然レバ名所方角抄ノ趣不審、

〔國花萬葉記<sup>八</sup>〕濱名の橋 入海より北の山際也、橋もとより三里餘、北也、古へは濱名を海道と

せられたる也、本坂越とて高し、山の北に今もあり、はしもとは今の海道なり、

〔和漢三才圖會<sup>六十九</sup>〕當國神社佛閣名所<sup>略</sup>○中

濱名橋 在湖水北山際、古街道也、今通橋本也、

〔東海道名所圖會<sup>三</sup>〕濱名橋

今廢す、橋本村はむかしの濱名の橋本也、又橋向ひに小松茶屋といふあり、これも廢す、橋跡は今  
纔に橋爪の石垣など殘る、<sup>略</sup>○中 濱名の橋の絶たる事は、いつのとしといふ事さだかにする人な  
し、むかしより度々の波濤に松原を打崩したるゆへ、橋もおのづから損はれ落たり、有時ははづ  
かに黒木をもつてわたし、圮橋などかけて、去ばらくとし月へたる事もありしと見へたり、又隣  
國の騷擾に橋を落し、ゆき、の自在ならざるを好む時代もありしにや、只古詠のみ多く残りて、  
その蹟だにもさだかにゑる人なし、むかし行基菩薩のかけ初給ひし山城の山崎橋も孝徳天皇  
の御代に架し給ひし津の國の長柄の橋も、こゝの類ひにやありけん、朽て久しき古歌のみ多し、  
〔三代實錄<sup>四十六</sup>〕元慶八年九月戊午朔、遠江國濱名橋長五十六丈、廣一丈三尺、高一丈六尺、貞觀四  
年修造、歷二十餘年、既以破壞、勅給彼國正稅稻一萬二千六百三十束、改作焉、

〔古今和歌六帖<sup>三</sup>〕はし

戀しくば濱名の橋を出てみよ、下行水に影やみゆると、<sup>○又見新勅撰和歌集</sup>

〔拾遺和歌集<sup>別六</sup>〕恒徳公家の障子に

沙みてるほどに行かふ旅人やはまなの橋と名づけそめけん

兼盛

〔重之家集〕さねかたの君のもとに、みちの國に下るに、いつしかはまなの橋わたらんと思ふには